

26 吉村喜作博士とバビンスキー徴候

田代邦雄

神経学において、もつとも重要な神経徴候といえはバビンスキー徴候であろう。バビンスキーが足底を針で刺激することで母趾が背屈するという足趾現象を発見し、それが錐体路障害を意味することを明らかにしたのが一八九六年であり、本年はこのバビンスキー徴候発見百年にあたり、その論文が発表された二月二十二日に記念会が行われることになっている。

バビンスキーの発表以来、この母趾背屈を誘発する手技が次々と発表され、種々の人名を冠する反射として今日まで伝えられ、教科書にもとりあげられていることも周知の事実である。シェファー反射、オッペンハイム反射、ゴードン反射、チャドック反射、ストランスキー反射や、その他にもいくつかの反射が報告されている。し

かし、米国の神経学者ワルテンベルクはバビンスキーの手技が最良の方法であり、それ以外の無数の変法は無価値であると厳しく批判した。

わが国の吉村喜作博士は一九〇六年(明治三十九年)に「バビンスキー氏現象ニ就キテ」と題する論文を医学中央雑誌に発表されている。吉村博士の論文は三篇に分けて発表され、その総数五十六ページにもわたる大論文であり、一八九六年のバビンスキーにはじまる歴史ならびに定義、その誘発法、病態生理、そして実例を詳細かつ正確な記録として残されておられるのである。その中で特筆すべきことは、バビンスキー徴候の誘発法として、「足背の外縁、とくにその後部で、外顆の後下方より前方に向つて外縁に沿つて刺激すること、しかも、足底の刺激が陰性であつても足背外縁より刺激し明らかに母趾が背屈することがあり、それをもつてバビンスキー徴候陽性とみなしてよいこと」を記載、しかも、その実例を写真でも示しておられることである。この足背外側を刺激する手技はチャドック反射として知られるものであるが、チャドックがこの手技を発見したのが一九一一年で

あり、実にチャドックに先立つこと五年前に吉村博士がその誘発法を見出していたことになり、本来ならば「吉村反射」として名を残すべきものであったといえる。ワルテンベルクの主張する数々の変法は無意味であるという意見に対し、実地の神経診察においてバビンスキー反射と、チャドック反射はその陽性率においても等価であり、むしろチャドック反射がより正確である症例も存在するのである。

吉村博士のさらに世界に誇るべき業績としては、これらバビンスキー徴候誘発の刺激の種類についても、原法やその他の誘発法のような機械的刺激のみならず、温熱刺激や電氣的刺激による誘発法についてもふれ、とくに電氣的刺激については、その刺激の程度を正確に知ることができることより、足趾現象の難易を比較するのにもっとも適していることを指摘している点である。その後、現代にいたるまでバビンスキー現象の研究には電氣的刺激が用いられており、その先駆的業績は賞賛に値する。

吉村博士は明治三十六年（一九〇三年）東京帝大を卒業、三年後の明治三十九年東京帝大三浦内科助手の時にこの

画期的論文を発表されている。明治四十一年より四十二年までの二年間、文部省留學生としてドイツに留学、明治四十三年、医学博士、そして、その後、三十六歳の若さで県立広島病院の第五代目院長となられ、のちに開業され広島関西病院院長をつづけられたが、原爆投下と同じ年である昭和二十年十月、疎開先で脳出血により他界された。享年六十六歳であった。

吉村博士はバビンスキー徴候で後世にも語りつがれる業績を残された他に、周期性四肢麻痺や左利きの性格分析の研究、さらには神経学以外の領域でも、大正四年に鎮咳祛痰剤であるプロチンを製造した人として記録がのこされているほど非凡な才能を発揮された人物であったのである。

（北海道大学医学部神経内科学講座）